

定有堂オブセッション その二

「町の本屋という物語―定有堂書店の43年」から



個人にとって、本がなぜ快楽の器かという点、もしこの社会の中で、なお個性を生きようとしたら、本を選ぶという点の中に、顕著に個性という青空を持つことが可能だからではないでしょうか。一冊の本は具体的に物質的なものですが、一冊の本を選ぶということは観念的なことです。快楽というものは観念的なものだと思います。

本屋の仕事は、本を並べるだけです。本を並べるだけでなく、それは、何か観念的なものを、形に置き換えている、

という気がしないでもありません。(11)

書店の個性化というのは、読者（顧客）とのめぐりあいの中にあると思います。書店が個性的であるのは、読者とともに物語をつくるということだと思います。(12)

本の中の話ですが、ある人が、ながく続けること、それ自体、大切なことだと語られていました。そのためには二つ大切なことがある。一つはそうしつかりと思える人が、まず何人かいないなければならない。それと、集まりというのは焚き火のようなもので、暖かいから人があたりにくる。でも、あたりにくるだけで、薪（まき）を一本ずつでも置いて行かないと消えてしまう。という内容の話でした。(12)

本が好きということと、本を並べることが好きということだけの狭い世界の中で、いつも青空と出会っている、と思うと楽しくなります。本の中で自分を探し、自分を生きる。本を並べることの中で、身震いするような出会いを夢みる。本の神話から、書店の神話へと張り渡された、そんな糸のようなものを夢みて、毎日生きています。(13)

「町の」というのは、歩いているとなにげなく出会うというくらいの意味だ。(13)

「どこにも夢がなかったから、ここに夢を託す」(14)

私の本屋は「定有堂書店」という。定有というのは聞きなれないかもしれないが、『実存』というのとほとんど同じ意味の言葉だ。でも、実存という言葉の持つ肯定的な響きとはほんの少し違って、「何かとてもかなわないな」という語感がする。ふと「この夢は途上のものかも知れない」という感じがして、ある時期好きだった言葉だ。(14)

本屋のミニコミ的人間関係って、結局一緒に本を読むところから始まる。(15)

本屋って本を並べるだけなのに、なぜ飽きないのだろう、と思っていたら、「そうか、実は人が好きだったんだ」と、今ごろ気づいた。『本に夢を託した人間』が好きだったのだと。(15)

読者という生き方は、いつも何かを順送りになっているよ

うな気がする。(16)

表現することではなく、むしろ無意味さに還かえるきっかけを探し求めていた。(16)

「本の中にしか事件は息づいていない」ように思えた。(19)

自分の好きな本に託して自分の世界を語ることも、本を通して友達をつくることもできる。(19)

「棚はいくらいいじっても、棚だけの表現力で完結するものではない」と思う。絶対的な棚というものはなく、人との関わりの中でしか生きてこない。(20)

見知らぬ土地で道に迷ったら、誰でも親身に道を教えてくれる。これはひとごととは思えない類(たぐい)のことだからだ。本屋の仕事にも、何かそれと似たところがあるように思える。きっと「本」に、特別な『親和力』があるのだろう。本に関する、「ひとごとでない」出会いがたくさんある。(21)

私は、本屋の仕事は、ほとんどお客さんとの出会いの中で覚えた。お客さんの中には町の書店人と親しくされている方が多く、彼らから仕事のやり方を間接的に教わり、そこからいちばんいい自分のやり方を自然に知った。お出入り先も、お客さんからの紹介の積み重ねだった。書店人の親切な幾人かは、仕事の勘所を教えてくださいました。人を喜ばせる本の並べ方があることを知った。(22)

井狩さんは、本を並べることには力を尽くし、「でもそれだけでなく、人を喜ばせるといふ方に究めなければだめだよ」と教えてくれた。(23)

長く続けるように。なんとなくやるように。論じないよ
う。(24)

辻々に本屋があつて、好みの本屋で顔なじみになる。読者が一代限りなように、町の本屋も一代限りだったりして、それでもけっこう町角や辻々に生まれたりする。辻で出会うのは魔物と、本当は昔から決まっていた。そう思うと、やはり町の本屋つてとてもいい、何かですよね。(26)

いまの世の中、主体的と言えるのは、ひよっとしたら読

書という行為しか残されていないのかもしれない。(27)

自分の仕事を振り返ってみる。それは、自分の愉しみを振り返ってみるのと同じ意味だ。

本屋を始めて十余年。素人で開業したので、必要以上に無我夢中で、無駄なこともたくさんした。でも、そうした無駄なことが、自分の本屋という仕事を結局愉しいものにしてしまった。思えば無方法だったことが、一番良いことだったのだと思う。近道をする必要は全然ないのだと気づいてしまえば、本屋という経験は、読者としての経験に始まり、読者としての経験に終わるといふ気がする。(27)

読者は、なぜある任意の本屋を好きになるのだろうか。これは、本屋としての経験でなく、読者としての経験で考えらるべきことである。(28)

自分で選んだ読者像を勝手に膨らませながら、並べた本の小さな工夫を見つけてもらうのを心を弾ませて待っているのが、結局のところ、本屋の日々のようだ。(29)

小さいもの、かくれたものには、こころした読者をひきつける親和力がある。(30)

「これでもあるのではない、何じもある」 (30)

本屋は本好きの人達であふれていた方がいい。そして、本好きどうしで知り合える場所だったらもっといい。(30)

長い間つづくのは、きつと「なんとなく」やっているからだと思う。(31)

いまあるからといって、いつでもどこでもありえるわけではない。(31)

書店を業として興すとき、たぶん私は、本をもう読まないという気がした。(33)

日常的にリーフ通信を生活の粹化したとき、奇妙な逆転のもとに、文章こそが迫体験されるのではないだろうか。(34)

生きるとは、理念を現実化することの他にはない。この方向を〈倫理〉としよう。(34)

総力という意味は、本屋はスペースのみの延長、展開ではその役割を完結しえないという確信です。(37)

人間形成の基本は、一人孤立して本を読むだけでなく、その自己修練を踏まえて人と交わることだと思えます。(37)

書店もスペースで完結するのみでなく、書物が、人と人とを交わらせるべくしてあるものならば、書店もスペースを超えて、人と人の中に役割を見出(みいだ)して行くべきものではないかと考えます。その了解を称して総力的であると思うのです。(37)

定有堂は、業を超えたところで、或(あるいは)は業を全(まっ)とうしたところで、スペースの枠を超える、という課題を追求してきました。(37)

「書店というのは人と人とのつながりでできている。つながりをつくっていくことが自分の仕事なんだ。人と人とのつながりがキチンとしていければ、どんな商いでもできていく」(37)

お互いの孤独と観念性を不可欠なものとして生きている人たちが、それでも何らかの形でつながろうとしたら、それは言葉によってつながる他はないという気がします。(39)

ここに読者の現在がある、という信念(39)

それがすべてとは言えませんが、出版社には必ず潜在的であれ共感する読者がいます。PR誌、新刊ニュースなどが、親密なつながりを温めつつけています。書店にできるのはこのつながりをできるだけきっちり生み出し、冷さないように持続することだと思えます。(40)

若いときに、本を読むのが好きで、他に何も望んでいなかったら、そうしたアイデンティティを社会へ出て飼いならせなくて、腰くだけな人生になってしまった。(41)

だから、町の本屋は、皆のオブセッション、本というものの、発生以来本性的にたずさえている「熱狂」を、この町の中で、なんとなく並べつつける。この世の中にいるしかない理由を求めていたら、人文書の豊富な言葉が、ここにもあそこにもあるぞ、と思えて嬉しい。(42)

この町の中で本を扱って生きる、というのは、不思議なことに自分を見失わない場所のようでした。町の本屋という世界ですから、たかが知れた世界です。でもこの「たかが知れた」というのが、実によかったようです。けつこう自分が好きに生きて迷惑をかけない小さな世界だからです。(44)

私の「本屋」論は、私が普通に暮らせる場所というところに落ちつきそうです。(46)

小さな世界だからこそ保たれた、リアリティとアクチュアリティの均衡だった。(46)

読者は一冊の本を選ぶことの中に、自分のアイデンティティを再体験する。本を選ぶことがいつも、ここにはない自分に立ち帰りここから出発するものであれば、この場所はやはり、アジュールと言っているのではないかと思うのだ。(48)

「本の情報」は、本屋に一番ころがっている。(49)

工夫が展示してある舞台なのだ。(49)

「いや、本の仕入れと……、うん、工夫の仕入れかな」
(49)

地方版で書評をすることの意義は何だろう。郷土の本は採り上げていない。「身近な」ところで必要以上に共感するよりも、書物で考えることの豊かさを地域の人たちと共有したいと望んでいる。(50)

主眼は、読者が本屋を選び、本屋が読者を選ぶような、同じものを見ている情景の確認作業。(50)

人の背中越しに本を選んでいるようで、飽きることもない。(50)

いきなり、自分に必要な「核心」に到達できることだ。
(51)

書物を扱う本屋は、「無縁」に近い(53)

本屋はこの自分の「展望」をじつは売っているのだ。本好きがしばしば現実を逆転して考えがちのように、世界は本当は「本」の中にあるなどと錯覚を楽しんで、この「展望」を温め、いじっている本屋の日常は、まるで「本の世界」の王様のような。(54)

私の話は、本が好きだということと、本が好きなたちと触れ合って暮らすのは楽しい、ということに終始するだけで、どうしても狭い。(55)

趣味のハマリ方は二つあるかも。好みの延長へ広がるか、好みへと「沈没」する。(56)

いっそ書店と本屋を呼び分けたらどうだろう。そうすると、パワーゲームから降りたところでゆっくり歩いて気が楽になる。(56)

語れるのは自分の「身の丈」のことだけ(57)

町の本屋って何だろう。街角にあるから街の本屋か？
そうではなくて、「まち」の中に縮むから町の本屋だと

思う。むしろ「縮む」から町の本屋なのだと思う。(57)

町の本屋はこの「私事」に縮んだところで、はじめて「まち」の中に自分の居場所を築けるのだと思う。(57)

「本」そのものはあまり地域性のないものだけど、本が好きな人はじつは地域的（ローカル）に読む。(57)

本を読み合う環境が身の回りに失われてきているから各個バラバラに「本屋」に辿（たどり）ついてしまう。(58)

「縮む」ことは良いことであつたはずだ。文化の古層から力を汲み上げることでもある。(59)

いま町の本屋は外圧の中で、それぞれにどういうカウンターカルチャーを築いていくかが問われているのだと思う。(59)

『伝えたいこと』

出版社としてでなく、「本の小売り」として作った「本」というのが良かったと思います。

「本」を読む人たちの十分な納得を尽くして作った本で

す。周囲の同志的に敬慕する方々が専門を尽くし、遺漏のない索引も付した、「本」そのものが愛情あふれる装幀で守られた本です。

著者は、この本の中で言っています、「一方的贈与という他者信頼」と、等価交換でない一方的贈与という人と人との関わりを重視しています。個を分断し支配するワナから救出することを教師としてのテーマとし、自由な人と人との交歓を「市井」に夢みた人です。「地域」とは、そのような人と人との「あいだ」幻想を生きられる場所かも知れません。(62)

「身一つではじめる」(65)

構想の中心は、売場がどうのという先に、集会所やミニホールがあつて、そこで何をやる、という抱負だった。(65)

スモールな本屋では、個人のテイストの交感として行われるので、流行の大勢（メインストリーム）としてよりは、方向性の先取りとして、時代の予感をおのずと予知させることとなる。「だから定有堂では、トレンドがテイストと

して現象しているわけだよな」(68)

町の本屋は、小さい。小さいから、身の丈で生きることが
ができる。いつも、人に教わり、本に教わる。(68)

書店はビジネスの世界だが、本屋はそういう意味では
『プライド』の世界なのだ(70)

心を支える言葉は、「運・鈍・根」だった。(70)

商いとしての本屋は結局「運」ではないかと思う。最終
的に本を選んで買っていくのはお客さんだし、自分にでき
ることは本を選び、その選んだ本を選ぶ人と、うまく出会
えるかどうかを、根気よく待ちつつづけるしかない。じつは
この「待ちつつづける」というのが私は好きなのだ。小さな
町の本屋の仕事の本質は、この愚鈍に「待ちつつづける」と
いう一点にこそあると思う。(70)

むしろ「本」という商品が、非近代的な「贈与論」の性
格を強くもつからなのだ。(71)

たまたま興奮する一章を見つけた。「個人ショップ」と
「百貨店」の交代が、思想的に事件として語られていた。
個人ショップでのシステムは、売り手と客の間に一定の人
間関係(精神的繋がり)を前提としている。いわば農村的
マーケットの商行為の延長上にあるのだ。百貨店には、質
屋がそうであったように、全くいろいろな種類の品物が寄
せ集められている。

ここでは「事物との馴れ合いからおのれを剝離」と
いう、近代化への離陸が完了している。つまり「商いの感
覚」の変容が思想的に語られていたのだ。

「これは本屋と書店の構造的景観が一目瞭然に俯瞰され
ているぞ」ととても興奮した。書店と本屋の「職能」の違
いのようなものを考える、大きなヒントだと思った。(71)

本屋は人から「運」がもたらされるのを待つ。書店は「自
分の活動内容に対する完全な無関係性」によって、「全く
完全に純商業的」となる。書店がビジネスへ往(い)く路
なら、本屋はアーカイック(古拙)なものへ還る路なのだ。
(71)

本屋って、本棚空間の座敷わらしかも知れないな(72)

巨大産業やテクノロジーに関わることなく、自分の「身の丈」からはじめる道を探しつづける。一つの結論として、「自営」「小さな商い」という場所にたどり着く。(74)

何よりも最初にあったのは、読者としての経験。(74)

私の本屋の話は、結局出会った人との話になってしま
う。(75)

人生のあるとき、立身して生きるか、それとも「自分らしく生きるか」の岐路に立つ。でも自分らしく生きるには才能がいる。芸術家なんかそうですよね。私は本が好きだけで才能もない。でも好きな本からは遠ざかりたくない。そんな時、「本を商う」という選択肢があったことがとてもうれしい。

「小さな商い」はとてもビューティフルなものだ。ここが始まりで、ここが終わりという性質の、さきやかだが至福の場所なのだ。(75)

店内をいろいろいじって、ある時ついにやることなくなる。そんな時は外へ出る。遠くの本屋をたくさん歩き、私の目ではない、目の付け所と出合ってくるのだ。(76)

古い良書の堆積層という感じだ。面白いのが、ふと新刊がその中に輝き、まわりの本まで意味ありげに押し出し、量を質に転化させて、圧倒された。私はあまりに整然と棚をつくりすぎてるのかな、とあやうく自信喪失しうになった。(78)

棚の分野が個別的に別々の人を待っているのではなく、トータルに一人の読者のすべての欲望に放たれているようで、それは独特な魅力に他ならなかった。(78)

ここでは本は並べてあるのでなく、転がっているのだ。うーん、本は雑貨だったのかー、と心の中に青空が広がった。(78)

出版社の人は、一つの本屋の棚をしょっちゅう見るわけでないので、品揃えとか展示の仕方的印象を決める。でも考えてみれば読者は毎日のように棚を見にくる。ここで何が、でも大事な何かが少し違う。

棚はやっぱり呼吸していると思う。いつも変化している。(79)

でも、すべては読者が決めることだから、そんな深読みからはすぐに目覚め、また読者の視線に帰る。(80)

読者の書齋のエッセンスが、店頭に蓄積されていくように面白かった。(82)

本屋をやっていると、町の中が本のネットワークで動いているような気になる。もちろん、そんなはずはないのだが、でも、私にはそんなふうに思えてならない。

鳥取という町のたまたまいが、そんな気にさせるのだろうか。(84)

本屋って、過激だな。本を商うことと、自分を生き抜くこととの間に、なぜか皆垣根がないと思えるのだった。

(86)

本屋は一步引いたところとする仕事だ(87)

本屋は「本」の流通の一番周縁で営まれる。周縁には「人」がいる。人と人の間でしか成り立たない仕事だ。(88)

地域の内部に向かえば、人の仕事はていねいになる。(92)

「本」はひとを親密にする。(92)

「本」自体が、人と人、地域と地域を触れ合わせる「媒介者」(トリックスター)なのだ。(92)

人が本を読み、生を営み、人生が幻だったと思う逆境にあつても、やはり手元に「本」がある。本屋の青空とは、そんな「本」たちとともにあることの喜びだと思う。(93)

私は、一般的な話をした。「本屋」をどう考え、どう営んでいるか、の話だ。

(一)まず、いつも受け身でいること。いい反響板でありたい。なにせ「人の好み」を扱う仕事ですからね。

(二)リアリティとアクチュアリティという軽いフットワークの考え方も述べた。例えば、本屋は一見して、この本が売れるか売れないかが(だいたい)わかる。リアリティ(造る側の主観性)は強いけど、アクチュアリティ(読者との共感性)が虚弱だな、売れないよなとか。

(三)仕事の姿勢としては「一点突破全面展開」。本屋

は小さいからいつも総力戦。といって無理するのでなく、仕事をいつも身の丈にとどめる。そして、何が一番肝要かを見定めてそこにシフトを切り替える。

(四) 以上をつづめて一言にすれば、いいバランス感覚を保てるような精神のコンディションを定位置とする。(93)

目利きと「受け身」というのは、同じことのように思える。あ、これは私の個性の中心核かも知れませんね。「自分」がじゃまをしなければ、いいものに出会える(96)

読書にひたっていると、人間の本当の仕事は、「自分自身」の人生を生き抜くこと」だよな、という気持ちが強くなってくる。(99)

なぜ「受け身」からはじめようとするのか。それは、たいてい力がないのに、力以上のことをしたい、と意欲しているからではないだろうか。

実力以上の多くを望むとき、自然な姿勢として、「受け身」に身を据えるものかも知れない。(100)

本が好きなら本屋になれるか。そうとは限らない。だから、ここには「物語」がある。(102)

利休は、拡大する中華思想という広がる波紋との接触反応によって、みずからに備わった小の美をはじめて意識していく。それが一坪にきわまる待庵の茶室だったのだ。

初心には「青空」がある。アーカイック(古拙)なものとの出会いだ。ハト派はだから「町」へ帰る。

私も品揃えを自分仕様になっている一人だ。「町」に帰ろうとしている。どこかで売れている本というのでなく、この町のこの一角で売れている本に戻ろうと考えている。

(111)

「才覚」というものは「同時代的な気分」を土台に花開いているものだ。その気分が変われば花もしばまざるをえない。(113)

目端がきいてどこかへ住み替えるのも定石だけど、でも、どこへも行かず、ここに居座るのもおもしろい。(114)

「読者」の原型と、どこで出会うのだろう。私の場合は「ミニコミ」だった。(119)

で、ふと思つてみた。本屋を引退したらどうするだろう、と。こういうこと考えると楽しくて、つい笑みが浮かぶのだが、やはりミニコミ好きは変わらない。だから、「定有堂書店」という名前のホームページミニコミだけは延々とづく。

そんな話をしてたら、家人が、「あ、それって知ってる。バーチャル書店っていうんでしょう」といい合いの手を入れてくれた。(120)

つまり、「エンドユーザーである読者の立場から物事がフィードバックする」。(122)

「町の本屋」は御用聞き需要を満足させる存在として機能を果たせるもののみが生きのびる。(123)

小さな町の本屋では、本を「探す」というより、本と「戯れる」と思ってもらった方がありがたい。本好きの店が選んだ「本の現在」。それを体験してもらおうのが本屋の醍醐味(だいごみ)である。こういう形態をセレクトショップ

というらしい。(128)

一冊の本は、人の思いで売れる。(129)

先日、そんな話をしていて気づいた。「なんでも」というのはモノの量をいい、「どれでも」というのは人を中心に考えた品ぞろえのことだ、と。なじみのお客が喜ぶものは「どれでも」並べますよ。それが私の仕事。(129)

既成のルールに乗った生き方ではなく、すべてが自分一人から始まる術(すべ)がないかを模索した、熱い時代だ。(130)

彼は「個性を捨てて、個性派書店だね」と言ってくれた。(132)

町の本屋って、集落社会にみられた売買の心意気に通じると感じる。(134)

定有堂で開いている読書会は、職場や地域が異なる人が出会う貴重なひとときだ。日常とは別の「知のリング」

に上がり、談論風発を交わし合う。心地よい応酬がある。教養には、そうした高揚感がある。

本の底力とは、凍えて居着きがちな心を言葉で駆動させ、人から人へとつなげていく力なのだと思う。(136)

情報共有の圏域サイズが小さくなっている(141)

「一本の木」が寄り集まり「土壌」を準備するのが目的だ。(142)

「ゆるいね」と好意的に指摘された。読書サークルが長命なもの「ゆるい」からだ、と思いが当たる。「ゆるい」というのは「応えすぎない」ことだと思う。例えばテキストの内容解釈に密着しすぎない。読書会に「結論」をつくらないということだ。話題がそれで行こうとしても、誰もルールに戻そうとしない。(142)

「縮小」のイメージを持つことが大事なのは、自分でコントロールできる「身の丈」をきちんと図面出しでき、真っ直ぐ歩けるからだ。最近、友人に「リングワンダリング」という言葉を教わった。輪形彷徨(ほうこう)だ。(143)

本屋がいま考えるとすれば、「縮小」のイメージ像をどう結んでいくかだ。小冊子は「真っ直ぐ」歩むための道標だ。(143)

循環サイクルを知る。(143)

ナラティブ思考だ。(143)

出口につながっている路だけを真っ直ぐに選ばばいい(144)

リングワンダリングは、レジリエンスという道標(出口)を見失わなければ抜け出せる。(144)

「本のビオトープ」がレジリエンスの道標というのが、定有堂の見当識(状況把握)だ。真っ直ぐ歩いて闇を抜けるだけの話だ。(144)

「本屋」は、雑草と同じように立ち上がる必要はない。定有堂は、本が好きで本屋をはじめたのだから、変えてはいけないものは、「本」にていねいに関与するということだ。これは自己言及性のような感じもする。本が好きだか

ら本が好き、というのはおかしいけど、「学び系」といつてみたらどうだろう。(144)

「破壊されたものは、環境だけでなく、関係そのもの」なのだ。この「関係」のサンクチュアリを守るのが「本屋」の仕事なのだ。(144)

「対話は特別な出会いとともに突然始まる」

関係を対話の中で構築できれば、本屋はそれをリングワ
ンダリングの道標とできるかもしれない。(146)

本が好きだから本が好きという自己言及性から離れられ
ない人たちだ。その自己認識を「学び系」と呼んでみた。

(146)

自分たちの立ち位置は、周回遅れのトップランナーだね
(146)

この「ゼロ」地点が大切なのだ。(146)

形のない自分の思いを語ることは難しい。でも自然や本

について語るのなら少し楽になる。(147)

ビオトープは点だ。でも存続するためには、種子を受け
とめるもう一つのビオトープが必要だ。だからカフェの中
にも本がなければならぬ。本に片寄せて見たものを語る。
想いを託した本を町の中で手渡しつづけると、やがて、
想いを文章にしたくなる人たちがあらわれる。その循環に
町の文化の車輪がひとつ動く。(147)

「奇想の本屋」

奇想というのは、規範から逸脱して、自分の執念の赴(おもむ)くままに作り上げる、素人仕事の域を出ない性質のもののようにも思われます。(151)

その人の「フレームワーク」(作業仮説)の基盤のよう
なものが見えてきます。いいな、と思ったなら、自分の「フ
レームワーク」をいったん捨てて、その人の「フレームワ
ーク」をいただいで、自分の一つの「窓」にしていけます。
この「窓」から、「本」の仕入れのコーナーづくりが広が
ったりします。私にとって、興味ある人、というのは、

「これから何をしようとしているの？」という人です。
(152)

本屋的人間もやはり、自分が選ぶ、並べる、ということの周辺に、付箋を付けているような気がします。この付箋を、私は「本屋トーク」と呼ぶわけです。(153)

「書店」のメタレベルとして「本屋」がある、と思っ
ているのですが、突き詰めて考えると、さらにその先にある
のは、「人」そのものが、メタレベルとして浮上するので
はないかと思えます。(154)

私が、いま話したいと思っ
ていることは、本屋という
仕事についてです。仕事を
語る、ということ、他人が
聞いて、「自分もやってみ
たいな」と思うような話
をする、ということ、私
は思いません。(154)

この「本」が好きで始
めて、「本」が好きなので、
取り巻く業界環境の悪化
にもかかわらず、まだ続
けている、というこれだ
けの言葉に、私の本屋人
生のアイデンティティは
尽きるのではないかと思
います。(155)

本が好きで本屋を続ける。あらためて考えてみれば、
大変恵まれたことだったんだな、と自分の幸せな巡り合
いに、感謝しています。(156)

人の「窓」のでき方を知ると、なんとなくその人の考
え方、生き方が理解できるような気がします。

その人の「生い立ち」は、その人の人生の付箋のよう
なものです。注意書き、但(ただ)し書きです。多くのこ
とを物語り、説明してくれます。(157)

日販さんの視点で物事を考える、という方向だったと思
います。(158)

「取引は個別」(158)

一般論で自己の取引のありようを主張しない。努力と貢
献の積み重ねと、その上に立っての相互の繁栄を考
えて、取引のフレームを作
って行く、ということ
です。「個別」だから
こそ許されたご支援、
というものが数多くあ
ったと思
います。(158)

関心そのものは大きいのですが、自分が出かけていくよ

りは、この一・五キロ、もっと狭く言えば、定有堂内にたずねてきてくれた人と、深く関わっていききたいという方針です。(159)

「本」の販売、という「本道」では、私の試みは、失敗の積み重ね、でした。結局、自分の趣味という「脇道」で助けられたのが、私の本屋人生ではなかったかと思えます。(163)

「本が敵(かたき)」

本好きという心の片寄りで、ふらふらしていて、道を踏みはずす、ということ案じての言葉のようでした。(163)

つまり、私の趣味は、「本」を読む、「本」について語り合う、「ミニコミ」を作る、この三つです。(164)

本好きのユートピアであったかもしれません。「ユートピアって何?」と聞いたこともあります。ある人が、「違う考え方の人たちが、楽しく集まって、そして決して争わない」と答えました。本屋の棚空間って、実はそうですよ。(165)

「本」を読むことによって、自分の世界をつくってきた人たちが、まさに、おそるおそる現実の社会に分け入って行こう、という時期だったのかもしれません。(165)

理念と現実をどうすり合わせるか? (165)

この奥田さんという人の周りにいると、きつとたくさんいいことに出くわすぞ、という気がします。(169)

「ビジョン」というと、先行きを長期的に見通す力、ですが、「トレンド」は、過去の文脈にそって、何かが始まろうとする直前の「動向」を読み取ることでしょうか?(169)

挿し木挿し木で繁茂した雑木林の疲弊をいま一度、「実生(みしよう)の木」、(つまり「種」から)植林しようという試みにも似ています。(169)

「底力」は、小さな動向の中にこそ、わかりやすく存在するのではないのでしょうか。

小さな本屋の特性は、「引き算」にあるのかもしれま

せん。「身の丈」への引き算です。小さな本屋は、時代の中で、できないこと・必要としないことを見極め、削ぎ落としていきます。メニューの多い料理店と、一つの得意料理で、一点突破で生き抜く、小料理屋の違いでしょうか。(170)

「引き算」……多種多様なものを用意することが大事なのではなく、何を捨てるか。この場所がこの場所であるのはなぜか？ そんなところを突き詰めるところに、実は大きな起爆点・成長点がある、という考えかと思えます。(172)

小さな本屋は、余計なものを削ぎ落として、自分の立ち位置へと回帰していきます。「オリジン」なもの、「アーカイック」なもの、最初の志、情念のようなものを、見出せるか否かが、大事な何かのようです。

「本屋トーク」の中心は、「分類」よりも「アラカルト」、という私の方法論でした。(172)

ほんのつかの間に、心をとらえ、心を拡張させる本。ビジネス的なものもそうですし、身近な暮らしを肯定し、そして輝かせる、センスのいい本。(174)

私にとつての「展示」とは、そんな、過剰なことをせずにはおられない、「本」とその環境への愛情のようなものです。(175)

「あれもこれも」ではなく、「これとこれ」です。伏し目がちなロバのぬいぐるみに心惹(ひ)かれて、店内に足を踏み入れてくれた人が、ロバさんのためにも何か買ってあげよう、と思ったときに、幅ハメートルほどのガラスの面展コーナーに横一列に並んだ本の中から、「あ、これ、私のために置いてある」と目を留めて、手にしてくださるような、「これとこれ」です。(175)

小さな本屋の店内は、棚がひしめき合っているので、「窓」が少ない。でも、なぜか、「青空」を感じる、という流れの話です。(175)

つまり、自分のビジョンの引き算です。引き算して、自分というオリジンに戻る場所、それが、私にとつてのカフェ空間です。(178)

でも、ある一冊の本に出会ったときに、きっと「我に返

る」のだと思います。それが、本屋の「青空」、そして、本屋の「窓」だと思います。

本屋の店内とは、人が自分のオリジンに戻る場所だと思えます。(179)

小さな感情のぎざなみが起きたりします。(179)

自分にとって、お気に入りの店は、この窓の開ける場所で、お気に入りの場所がなくなると、窓も消えるのだ、という。(180)

「窓」から見えるものは、長い間、たくさんの人たちが、「本」というものを見つめてきた、人間の想いと記憶なのではないかと思えます。「本」の底力の一つとして、我に返らせる、という再生の原動力のようなものがあるのではないかと思えます。うっかりすると簡単に失われる「ぎざなみ色の染めもの」のようなものかもしれませんが……。(181)

本が好き、というのは、実は自分でもよく説明のつかない事柄であったのではないかと思えます。

好きなことだけしたい、と引き算しつづけたら、そこに

は「本が好き」というライフスタイルしかなかった、というところかもしれません。

本が好き、という言葉で、一種しり込みしながら世間から後退していく。こぼれ落ちる寸前の土俵際に、もう一度後ろ足を支えてくれる、相撲でいうところの「徳俵」のように、人生の底をついて、なお立ち上がるものとして「本」があり、そのような場所で「本」に出会ったという物語と、そして本を読むだけでなく、本を売るといふ思いがけない歩みを始め、歩みつづけてきたという物語を語ってみました。(182)

本が好き、本屋が好き、本屋が好きな人が好き、これだけだったかと思えます。(183)

ミニコミ出版、自分の工夫で本を集める、そして集めた本が読者の目に留まり、その工夫が発見されること、そうした本屋の中の本にはじまる小さな「驚き」、それを称して「本屋の青空」とも呼んできました。本にはじまるころのなにかが開ける「驚き」は、語り合ってみたいという絆を生み出します。読書会のはじまりはそんな「本の力」にあったかと思えます。(183)

「身の丈」「ビオトープ」とか縮小・縮減が定有堂の生息域・テリトリーでした。定有堂の身の丈の世界には「青空」があり、「ここから何かをはじめよう」という呼びかけはじつに簡明な響きだったのですが、青空は生成変化の中へ流動し、つまり本がなくなり「定有堂を知らない子どもたち」に語りかけるにも、もう残されたのは言葉だけになりました。(183)

「小さな声を外部のものが解釈すると別のものになる」(183)

「初発衝動」の強さというものが小さな本屋では大事です。「やりたいからやる」という「情念」です。本とか人とか、この「情念」に共鳴してくるものがあり、本屋が形成されます。

身の丈を超えなければ往来、町角での共鳴が凝縮して「町の本屋」というものが誕生します。この共鳴を育むものが「物語のある本屋」です。

本屋には「物語」が必要だと思います。この生成を外部から見ると「个性的本屋」ということになります。(189)

十年を過ぎると持続するためには「個性」を超えたものになる必要があります。(189)

賞味期限が来ているのですから、変わるしかありません。十年ごとに個性を変えるわけです。でもそれは「本」という「身の丈」の世界の中での出来事だと考えました。(190)

本屋を営む「個性」は何度も変わらなければなりません。ただしすべては本屋の中での「物語」です。集めた本を人が発見できるか、発見し尽くされたら集め方を変える。集め方には限界があります。自分の個性が集めるからです。しかし、集めた本を組み替えさせるような出来事があります。それは人との出会いです。(190)

《淡雪の中に頭(た)ちたる三千大千世界(みちおほち)またその中に沫雪ぞ降る》(191)

淡雪が消えて沫雪が残るといふ個性の果て(191)

「読書」に追い越される(191)

本屋の中に入れ子構造的にあったサークル、そしてミニコミ誌というのは一体何だったんだろうと思います。淡雪と沫雪にたとえられるような光景だったのかなと思います。

淡雪は消え、沫雪は残りました。(192)

本が好きだから好きという世界には、欲望はありますが目的も対象もありません。(208)

本が好きで、それ故人生の一步がなかなか踏み出せなかったという経験はないでしょうか。目的もなくひたすら本に耽溺するわけですが、それとは別のところにあるのが日常の暮らしというものです。本を読むのは楽しい、でもその楽しさが所を得るのは稀有なことです。(208)

本が好き、いつまでも解答を与えてくれないから本が好き。(209)

このような巡り合わせて生きる人のことを「本好き」と

いうのでしょうか。(209)

本屋的人間というのは「いのち」を使い切る、その手立として「本」しか思いつかなかった人のことです。

自分を変えられる本に出合うことがあるかもしれないし、ないかもしれない。そしてそんなことのすべてを忘れた頃に立ち現れる本があれば、それは衝撃の一冊。町の本屋の風景とはそのようなものです。(209)

